

名教自然碑の由来と教育私見の断片



名教自然碑の由来と教育私見の断片

煙洲 鈴木達治

昭和十年私が横浜高等工業学校長を辞するや、校友諸氏が記念の為、私の銅像を校庭に立てんとの発案があった。私は其厚意はありがたいが、私は如何に考えても、銅像になる身分ではないと思つて固辞した。しかし折角の厚意を受けるとすると、甚だ勝手の申分であるが、銅像でなくて、記念碑にしてもらいたいと返答した。両者何れにするか、容易に決しなかつたが、終に私の強いての乞いを、容れてくれ、記念碑にすることになった。碑の石材は、茨城県太田町の附近の大理石の山にあるので、阿部滋弘、中村順平の両教授と同道して見に行った。掘り出したままの石は、三十幾トンもあって、山でも珍しい巨大のものであるので、運搬は容易でない。そこで山元で大いに削り減らし、更に学校に運び込み、二十幾トンに仕上げたのであった。

表面に私の悪筆で名教自然と題し、其直下に煙洲鈴木達治と署名した。使用した落款は四寸六分角の桜木に、彫刻せられた美術的のもので、蘇峰徳富先生が、態々私のために、製作して贈られたものである。裏面に刻した碑文は、同先生の撰で、三溪原富太郎先生の筆である。其撰文は

丈夫自有衝天氣、不向如来行処行、煙洲鈴木君達治ノ如キハ、ソノ人興、君初メ京都ノ同志社ニ学ビ更ニ東京帝國大学ニ入り、理科ヲ修ム。大正九年一月十九日政府勅令ヲ以テ横浜高等工業学校ヲ設立スルヤ君即日選バレテ其校長ニ任ゼラル。創立経営ノ業、専ラ君ノ努力ニ俟ツモノ多シ。然ルニ大正十二年九月一日大震火災ノ起ルヤ、横浜最モ其厄ニ罹リ、全校ヲ挙ゲテ殆ンド焦土ニ帰セシメタリ。

此時ニ当リ、青天霹靂、命令一下、愛知県名古屋市ニ移転セシム。君慨然トシテ起テ勇奮自カラ禁ゼズ或ハ市ノ有力者ニ懇へ、或ハ当局者ニ抗議シ、奔走周旋寧処スルニ違アラズ。逐ニ現場ニ於テ漸ク該校復興ノ目的ヲ達スルコトヲ得タリ。

君ハ夙ニ皇室中心主義ヲ奉ジ、躬行実践一ニ自発ノ力ニ頼ルヲ旨トシ、特ニ学生ヲシテ各自ノ人格ノ尊重スベキヲ自覚セシメ、学生ヲシテ天賦ノ才能ニ応ジテ、其所長ヲ發揮セシムルコトヲ教育ノ主眼トシ、而シテ自ラ三無主義ヲ標榜ス。曰ク無試験、曰ク無採点、曰ク無賞罰、君ヲ知ラザル者、皆ナ其言ヲ異トセザルハナシ。

然モ其ノ効果ハ頗ル著明ナルモノアリ。コレ職トシテ君ノ誠意ノ学生ニ感孚スルトコロタラズンバ非ズ。而シテ横浜高等工業学校ガ特殊ノ学風ヲ陶冶シ、我教育界ニ於テ一種ノ異彩ヲ発シ、超然独歩ノ觀ヲ呈スルモノ寔ニ偶然ニアラザルナリ。

此ニ於テ君ハ創立滿十五年ヲ期シ、自ラ選抜シタル後任者ヲ推薦シ、悠然トシテ去レリ。君ノ如キハ進退出処実ニ其道ヲ得タルモノト謂フベシ。

比口故旧門人碑ヲ校庭ニ建テ、君ノ徳ヲ頌セント欲シ、文ヲ予ニ徴ス。予君ト相得ル浅キニ非ラズ、欣然ソノ知ル所ヲ鏘シテ以テ後ノ君子ニ諒グ、然モコレ未ダ君ノ全面ヲ罄スニ足ラザルナリ。

昭和十二年十一月一日

蘇峰 徳富猪一郎 撰
原 三 溪 書

(註) 不向如来行処行、如来行ク処ニ向ツテ行カズ

碑は今の国大正門の正面、本館の玄関前に建てられ、恰かも出入の人々を送迎して居る様に見える。所で名教自然の文句の意味を質問する人は、今以て絶えない。或る時は全然見知らぬ人が、突然来訪して、名教自然の解釈を求められたこともあった。余程教育に熱心な人と見える。又高工出身者の中にも、名教自然とは何を意味するか、在学中学校長より説明を聞いたことはない、只名教自然とは、多分この様なことであろうと、自分勝手に解釈して居って、今日も猶しかと考えて居ると、語る人もある様である。私としてはこれを説明する義務はある。また説明する機会もたびたびあった。しかし未だかつて一度も説明したことはない。

碑の除幕式の日、徳富蘇峰先生が来場せられ、先生の撰文中の、不向如来行処行の文句をとらえて、鈴木と云う男は、仏さんが西へ向って行けと云はれても、自分が行きたくなければ東へ向って行く、孔子さ

んが東へ向って行けと教えても、自分が行きたくなければ、反対の方へ行くと云う男で、こんな人は共產主義者にならなかつたことは、実に仕合せであつたと、先生の撰文の一節を解釈せられた。私は謝辞を述べた、其片鱗を挙げると、次の様なものであつた。

学校長は学生に対しては、親の様なものである。親が子を育てるのは、ただ子を大切にすることのみでは、全部ではない。外出の帰りには、何かお土産を買ってきて、子供を喜ばさなければならぬ。親子の情愛と云うものは、誠意がこもって居るから、些細なお土産からでも猶一層深まるものである。うまいものが多いからとて、毎たび羊羹やせんべいのみではいけない。子供の心理を察して、玩具なり何なり、手をかえ品をかえて、子供をあかさめ様に、子供の気分には活気と新鮮味を与えてやらなければならぬ。子供に朝昼晩の三度の食事を与えるのみでは、こと足りないのである。教育家の心構えも、それと同じことである。名教自然は百貨店で、東京で云えば三越、横浜で云えば。野沢屋の様なものである。其処へ行けば、菓子類でも果物類でも、玩具類でも、子供の好きな何んでも売って居る。その様に名教自然の中には、釈迦も、キリストも、孔子も老子も居る。私は貧乏で財布が軽いので、思うままにお土産を買うことが、出来なかつた。その様に浅学不才で、折角名教自然と云う百貨店を見出しながら、充分のお土産の仕入れが出来なかつたことを遺憾といたします。後の高邁卓見の教育家が名教自然と称する百貨店から、沢山のお土産物を仕入れて、青年学徒を満足せしめるであろう。それを私は又希望するのである。此が私の謝辞の大意であつた。

私の浅学寡聞のためか、名教自然と云う成語又熟語の先例を知らない。これは偶然私の脳裡に浮び上つた文句で、これこそ私が教育上実行したことを、最も簡單明瞭に要約したもので、私には一種の靈感の形で将来の目標もこれに依るべきであると悟つた時、私の将来は急に明るくなった気がせられた。

終戦直後に税と新円の災難に遇い、窮乏のため、新刊書を購読することが出来なかつた。余儀なく所蔵の旧刊本を拾ひ読んだ。その中に那珂博士の支那通史があつた。之れを読むうちに、次の事実を発見した。西晋の時代に、世に言う竹林の七賢なるものがある。其うちの一人である王戎と云う人が、或る一人の就職志願者に面会して今日の所謂人物試験をした。王戎は、「聖人は名教を貴び、老荘は自然を明かにす、其旨同じきか異なるか」と質問した。受験者は「将無同」と答えた。(はた同じきこと無からんや)それで及第したので、時人之を三語の椽と称した。椽は属官で、答案は将無同の三語であつたためである。これは余談であるが、とにかく名教と云う語が、僅か一行の中に自然と同居して居る。聖人は孔子や孟子を指すもので、老荘は老子と荘子を云うのであるから、王戎の此の文句に由来するとすれば、名教自然は孔孟老荘の支那哲学の表顯である。しかし私の名教自然は、それとは何の縁も、ゆかりもないので、那珂博士の支那通史の、此一節を読んで名教と自然の文句を見たとき、私は一寸驚いた次第であつた。

私の専攻は化学であつた。化学以外の学科には、手を染める余裕がなかつた。処が横浜に来て、初めて学校長となり、一学校の経営に當って見ると、なかなか他に余力がないので、私は思い切つて、多年に渉り、化学の授業講義のため、編集した数十冊のノートを、庭前に持ち出し、悉く焼き捨てた。又化学物理

数学の書冊及び雑誌類は、高工と商工実習の二校と、郷里の二つの図書館へ寄贈して、全く背水の陣を布いて、其れから生れ更った気持で勤務した。

名教自然と云う文句を得たことは、私の横浜高工生活に、重大なる影響を与えて居ることを感ぜずには居られない。三無主義其他の施設（計画や対策の意）は、開校当初よりの事であるが、その施設に益々自信を与え、又深からしめたものは、名教自然の力と云うべきであると思うのである。先きに此文句は偶然私の頭に浮び出たと、記述しましたが、其時は偶然であったのであるが、よく考えて見れば、遠く青年時代にさか上るのである。これについては、私は熊本時代に於ける横井小楠の詩句を思い出さずには居られない。即ち靈智神覚湧如泉、不用作為付自然である。此詩はかねてより私は感銘して愛誦したもので何事によらず人は作為を用いてはいけない。自然に付して、無理をしてはならない。そう言う考えは、平素私の頭に潜在して居った。この潜在意識は、私の教育上の業績に絶えず、影響を与えて居ることは、私自身に自覚して居ったのである。それがたまたま、名教自然となって、言えば具体的に表顕することが出来たのである。

かくして名教自然と云う私の教育主義の標語に達し得たが、前に述べた様に、名教自然の意義の説明は容易に私には出来ないのである。名教自然は自由主義の教育であるとしても、其又自由主義とは、どう言うものであるかの説明は、同様に私には出来ないのである。元来私は心理学とか教育学と云う様なものは不得手で理解が困難である。故にその様な書物は未だかつて、一冊も読んだことはない。心理学とか教育学に精進した人は、学者であることにはまちがいが無い、がしかし必ずしも教育家であるとは言えない。私は若し心理学や教育学を研究して居たならば、多分に其学理に拘泥し、又束縛を受けたことが、想像せられるのである。私は何事にも拘泥したくもなし、又束縛を受けたくもない。

私は初めて文部省に呼び出され、松浦局長から口頭で、お前を今般新設される、横浜高等工業学校校長に任命するとの旨が申渡され、同時に学校は万事、学校長に任かすのであるから、よろしく頼むと付言された。学校の経営は勿論文部省の監督下にあるが、万事学校長に任かすとの一言は何よりも私には有難かった。

横浜高工は大正九年の四月に開校せられ、其年の十月に開校式が挙行せられ、中橋文部大臣や、枢密院副議長清浦伯も臨席せられた。私は開校式辞に、我校の今後取るべき方針を開陳し、無試験、無採点、無賞罰の三無主義を披露した。式後大臣随行の局長等から、三無主義で行くことが出来るなら、実に結構であると、いささか消極的ではあったが、別に異議疑問をはさむ人はなかった。大臣は実業家出身であった為か、一言の批判もなかった。初め開校式に中橋文部大臣は臨席することを容易に承諾しなかった。東京以外の学校の開校式には出席しないと云う理由であった。私は再三懇請して、おしまいに懸念に喰い下がって、終に目的を達した。三無主義の黙諾を得んがためであったが、大願成就して、私は得意満足であった。

三無主義は決して私の創意のものではない。又この三無主義を実行するに於て、私の取った手段と云う

ものも、何一つ私の創意と云うものはない、凡ては先哲又は先輩同僚の人々が其範を示してくれた足跡を、其ま踏み又其形式に、少し許りの修正を加えたものに過ぎないのである。それであるから三無主義を採用した由来を初め、総て私が学校に於て施設（計画や対策を立て）実行したものを説明し、其決算を名教自然に持ち行きたることを、説明するためには、私は其れまでに過去に於て従事した各所に於ける学校生活の一通りを述べなければならぬ。私の自由教育は其処から来て居るからである。まづ学生として私の学んだ学校は、京都の同志社であった。同志社で最も感化を受け、今でも印象に深く残って居るのが、浮田和民先生であった。先生は後に早稲田大学の教授として、令名高かったが、私は先生から歴史を教わった。歴史の試験の時には、先生は生徒の数だけの試験問題を記入した紙片を持ち来り、教室に入ってくる生徒に、順次其紙片を自由に取らした。丸でくじを引く様なものであった。一番の番号を引当てた生徒から、順次口頭にて記入せられた問題に答えるのである。試験が終れば、其学期中に学んだ、歴史全部を復習したかたちになるので、非常に有益で試験に出席するのは、苦痛でなくむしろ楽しかった。他の教師は普通に試験をしたが、私の級は四十幾人かの組であったが、在学中試験に苦痛を感じたものもなく、席次も知らず、落第したものもなかった。当時の学校長は一世の師範とも云はれる新島襄先生であった。先生晩年多病にて、専ら大磯に静養せられたため、不幸にして私は僅か兩三度しか、先生の講堂に立つての講演を聞かれなかった。先生の風格は専ら当時の同志社の校風から知り、又感得し得たものであった。

同志社を卒業して、九州の熊本に行き、第五高等学校の職員に列した。当時五高には夏目漱石、小泉八雲、秋月胤永と云う著名な教師が在職して居った。秋月先生は幕末会津藩の名士で、会津戦争の参謀長であった。漱石先生は課外講義に列して、印象が深い、他の両先生には、教室に於て直接警咳（けいがい その人の声）に接することのなかったことは、今でも後悔して居る。五高でも学期又学年末の及落会議は、いやなものであった。五高を去って、私は東京帝国大学の理科の化学科に入学し、再び学生生活をした。三年の後、仙台の第二高等学校の教授となって、五ヶ年間在職した。其間に私は学校教師として、色々な事を経験した。校長は中川元と云う人で、森文部大臣の秘書を務めた実に温厚篤実の人格者であつて、校務は殆んど教頭三好愛吉氏に一任して、超然とした長者の風格があつた。三好氏は中川元先生の後継者となり、後宮内省に入つて、秩父宮殿下を初め、皇子扶育官長となつた、著名の人であつた。不幸短命にして在職中逝去した。

私が在職当時生徒が何か催し物を考え、一日の許可を要請し、又その翌日を休業とする様なことが、時折りあつて、学校当局を困らせた。何の糸口であつたか忘れたが、兎に角生徒の要望通り一週間ぶつ通しの陸上大運動会を催した。私は三好教頭とは至つて懇意の間柄であつたため、無論其議にあづかつたのである。三好教頭は所謂ワンマン的であつたから、他の教授連は多くは傍観者であつたのである。所が運動会の最中に、文部省の官吏が偶然か来校し、視察状況を東京に帰り報告した。恰も（あたかも）何事も知らない中川校長は、所用のため東京に滞在中で、初めて運動会を聞き大に驚かれた。本来二日以上の上学休業は、本省の認可を要する規則があるのを、二高は全然之を無視し、校長自身も知らなかつたのであ

った。此の内規違反の跡始末はどうなったか、私には記憶がないが、別に大問題にならず、立消えになった。一方一週間に渉る運動会のプログラムが、三日、四日と進行すると、段々に緊張味を失い、全くダレ気味になって終りを告げた。終了後三好教頭は、そのダレ気味の不始末につき、痛烈なる批判を加えて、生徒を訓戒した。其れ以来生徒は慎重になり、態度はあらたまった。

日露戦争の当時、兵式体操の教師は、予備軍人であったため、全部召集されて、其学課が休止となった。中川校長は或事件に就き、全校生徒を講堂に、招集したことがあった、機会をとらえて、私は校長に願って、私が演壇に立つ許可を得た。私は現下戦時中であるのに、生徒諸君は戦場に立たず、平和に学生生活を続け得るのは、徴兵猶予の特典があるためである。然るに現下兵式体操の教官なきため、其授業を中止するのは、国家の非常時、実に遺憾千万である。体操教師なしで、学生のみで自治的に、兵式体操を復活しては、どうであろうかと、相談を持ちかけた。所が三部の学生（医科志願）は賛成したが、一部の学生（法文志願）と二部の学生（理工科志願）の全部の賛成が得られなかった。ところが三好教頭は発憤して、自ら仙台の四聯隊へ行き、教練の教育を受け来り、二高全校の総指揮者となり、兵式教練を復興した。其成績は軍人教官時代よりも、遙かに良好であった。時の文部大臣久保田氏は、東北地方巡回の途次、二高に立寄られ、生徒の分列式を受けられ、喜んで帰られた。三部の学生指揮者は加藤耕造氏で、大学卒業後横浜市の関東病院長で、又我校の校医でもあった。教頭三好愛吉氏とは、かくして五ヶ年間同僚であった。同僚とは言え、私は全く兄事して、各方面に於て貴重な教訓を受けた。

中川校長は温厚篤実で、実に長者の風があった。中川校長に就て、忘れ得ぬ記憶を私は持って居る。一夕私は校長を私宅に訪ね、私の学校に於ける待遇の不満を訴えた。此れは私の懇意な同僚から、色々な入れ智慧を受け、又煽動せられ、私も至極もつとも考えたためであった。校長は黙して暫く考え込んだ後で、静かに私に向って「君でもそう言うことを考えるか」と応酬せられた。「君でも」と云う一言を、私の尊敬し又恩顧を受けた、大人長者風の校長の口より聞いた時、何とはなしに冷汗が出た。校長から私の人格を信ぜられて居たに相違ないと思っておる私は、自ら自分の人格の尊厳を失い、乞食根性を顕わしたものと、即座に恥ぢ入って、校長の次の言葉を待たず、私より能く分りましたと只一言、平身低頭して、話題を他に移した。

私が大学を卒業した当時、私の就職の希望は教育界ではなかった。併し理科出身では、教育界以外には容易に適当な地位が得られなかった。二高在職中に日露戦争が勃発し、転職の期待は、益々困難になったことを感ずるので、私は折角出発した教育界で、終始するが良いと決心した。教育に専心するなら、高等学校は大学への予備教育であるから、それでなくて、教育専門の師範教育に移りたいものであると考え、其旨中川校長に相談した。中川校長は私の決心を諒とせられ、自ら広島高等師範学校校長北条時敬氏と謀られ、私は二高在職五ヶ年にして広島へ転勤した。三年間広島高師に在職したが、私の理想は裏切られて、全く失望した。さすが師範教育であるから、礼節や、規律や、服従の道徳は能く励行されて居る様である。併しそれは単に表面的であり、形式的であり、高圧的であり、又万事が官僚的である。教育の第一

義は自覚であり、訓練は第二義のものである、と云う私の理想とは、全然逆であることを見出した。教授の末席に列して、師範教育のこの大勢を転覆することは、無援孤独、如何ともすることが出来ない。多少の革新を計画したが、大なる抵抗を起し、諭旨免官の災厄に逢わんとした。この時偶然の事から、関係も連絡もない、東京蔵前高等工業学校へ転任の交渉がまとまり、一度も蔵前高工の教室には顔を出さず、又手嶋校長にも只一回、しかも初めて面会したまま帰朝後蔵前高工へ転勤する約の下に欧州留学の途に上った。

私が独逸のハノバー市に滞在中、手嶋校長は外遊して同市に來り、私と会合した。其際手嶋校長は次の様な話をした。自分は米国へは幾度となく行く機会があったが、印度洋を経由しての歐洲は、今回が初めてであったが途中香港を初め、シンガポール、ペナン、コロンボの寄港地に上陸して、南洋方面の資源の豊富なるに驚いたとて、詳細に其所見を語り聞かされた。私も手嶋校長と同じ航路を取ったのであるが、工業に経験のない、普通の教育者であった、私は、只々異国の珍しい風景や、珍奇の事物に、心をうばわれたのみで、何等の抱負も経緯（政治）も浮ばなかった。全く手嶋校長の卓見に敬服した。これが私をしてオランダ旅行中、オランダ領印度を経営するに、如何なる教育施設（計画や対策を立て）をして居るかを、視察する機会を作らしめた。これが又後年横浜に赴任した私が、南洋研究のため特に堀江不器雄教授を派遣した因縁でもあった。文部省が南洋専門に在外研究生を派遣したのは、前後を通じ堀江教授一人であったかも知れない。私がまた東洋協会発起の実業家の南洋視察団の一行に加わり、団長となって二ヶ月間の南洋視察旅行をしたのも、又商工を中心として、横浜市民と共同にて、大陸会を起し、海外発展に努力したのも、すべて関連した事柄である。

又同校長はハノバー市には、補習教育としての夜学校はあるのであろうから、それへ案内せよとの事であった。私は当時補習教育とは、如何なるものか、少しも知らなかった。従って当市に其の様な学校の存否などは、念頭になかったため、大に当惑し、知人に聞き合せ、やっと間に合せた。其時校長は、蔵前商工に夜間の工業学校が、附設してあることから、補習教育の必要を説いて私に聞かした。それで私は英國へ転学してから、マンチエスターの様な大工業都市にある、夜学校を見学した。後年横浜高工に赴任すると、時の市長久保田政周氏に説き、市の補習教育機関として夜学校を設立した。それが今日の市立工業商等学校の前身である。蔵前高工では、毎年中華民国の学生五十名を收容した。之れは手嶋校長は時の小村寿太郎外務大臣と協議し、当時の清国政府より教育費を支出せしめ、委託生として入学せしめたものであった。これなどは手嶋校長の卓見を能く証明したものと云えよう。要するに校長は有能な教授を登用し、信用し、内顧の憂なく、専ら校外より学校を統治したものと評しても、決して差支えがなからうと思ふのである。実に傑出した異例の教育者であった。私はこの校長に信用され、指導され、教訓されたことが、最も多かつた。

手嶋校長は老齡のため隠退せられ、其跡は首席教授の坂田貞一博士がついだ。坂田校長の下で、私が記憶すべきことが、一つ残って居る。それは私の担当する学科に、新に採用する教師の人選につき、校長

と私との間に意見の相違があつて、双方共自説を堅く主張して譲らなかつた。最後に校長は決して激してはいないが、私に向つて、君校長になつてくれと云われた。此一言で私は瞬間に心機一転した。即座に校長の意見に服従して、私は好い気分になり、校長も喜んだらしかつた。私は其時お互に地位をかえて、考へなければならぬ。即ち治者は、被治者の思いを察し、被治者は、治者の思いやりをして、決して何処までも、自分の態度のみを固執すべきでない、心機一転したのであつた。先きの二高中川校長の「君でもそう言うことを言うか」との一言と今の蔵前坂田校長の「君校長になつてくれ」との二件は、余程私の肺肝をついたとみえ、私の終生忘れ得ないものとなつた。

記事は長々と横道に入つたが、私が横浜に赴任してから、学校教育に施設（計画や対策を立て）したのは、以上の経験から来たものである。中でも何れの学校でも経験した共通のことは、学年末に於ける試験成績会議、即ち生徒の及落会議であつた。及落は試験の点数に依つて、決せられるのは、勿論のことで、学校には及落の規準は、内規があるのである。及落会議の前には、落第しそうな生徒のため、彼の友人連中は、三人とか五人とか組をつくつて、教師の私宅へおしかけ、点数もらいの運動をしたものであつた。この様な教師と生徒との間に、点数の取引のあつたことは、当時私と同時に五高に居つた、寺田寅彦の隨筆の中でも、その様な記事を読んだ記憶がある。及落会議は教師との間で、落第点をめぐり、譲れ、譲られないの論争である。時には複雑な感情論にまで走り、往時の元氣のよい、教師連中のこととて、最後には熊公や八公の喧嘩にまで発展したことも、私が経験したことであつた。詮議の結果愈落第と決定すれば、

当人は原級に留まつて、もう一年同じ学課を学ばなければならない。かくして二ケ年間同一学課を、学習しても、見ちがえる程、進境を見せるものは先づない。成績考査の時に、やっと問題なしで通過すれば、先づ上々の方で、落第さしたとて、当人に取つては、さまで効果のあるものではない。只学校は試験と云う看板をかけて、生徒を威嚇すには、多少の効果があるかも知れない。多くの教師の間には、試験採点が非常に厳格で、自己の採点に、他の容喙（ようかい）口出（くちだ）を許さぬ人もあれば、又中には点数などには、一向頓着しないものもあつた。今日の様子は私は知らないが、昔の点数会議と云うものが、中々見て居ても、又聞いて居つても、面白いものであつて、私もこれから、色々のことを学び得た。

とに角私は二十年近く試験制度の学校で教鞭をとつた。其間種々の出来事に出会い、試験と云うことを、考えさせられた。一体学校教育と云うものは、学生生徒の頭に智識をつめ込むと云うことが、第一義的のものであろうか。これは論語の中にあることであるが、或る人が孔子に向つてあなたのお弟子の内で、誰が最も秀れた人物であるかと聞かれた。孔子は答えて顔回と云うものがあつて、学を好む人であつたが、不幸短命で、惜いことには、今日は其人は居ないと云つた。孔子は弟子の顔回を賞めて、博学多識とは言わずして、単に学を好むと云つたことは、大に味うべきことと思う。私は孔子のこの学を好むと言つた意義を玩味して、思い当る所がある。学校に於て学生生徒に、智識を授けるに当り、試験制度のみを採用することは、果して賢明なことであるだろうか、疑なき能わずである。そこで私は二十余年来の経験から、断然意を決して、無試験制度を採用した。無試験でも猶他に採点する方法を考え得るが、如何

なる方法でも、一切採点をしないこととした。即ち無試験無採点制度である。此制度には多数の学生は、落第がないから、別に苦情を唱えないが、或る一部のものは、自己の優秀性を発揚する機会がないため、何か物足らぬ気持があつて、勉強に精が出ないと云う非難があることに、注意しなければならない。

教育と云うものは、自覚が第一義的のもので、訓練は第二義的のものであると云う信念が、夙に(つとに)以前から)私の頭を支配して居った。私は戦前の軍隊教育が、訓練の点に於て能く行き届いて居るのに感服したものであつた。其一例を挙げると、兵営には火災のないことであつた。学校や、公社其他会社等の造営物は、よく火災を起したが、兵営の火事と云うことは、殆んどなかつた。実際兵舎を見学して見ると、万事能く整頓して、如何にも訓練の徹底して居ることに感心せしむるものがあつた。併し軍事も教育である以上、訓練と共に自覚を促進せしむる教育でなければならぬであらう。軍隊では自覚と云う精神方面は、専ら忠君愛国であつた。當時に於ては忠君愛国は最高の道德であつた。最高の道德であつただけ、それはあまりにも形式に偏在し、精神にかけ、自覚が足りなかつた。これは徳川時代に隆盛を極め、世道人心を維持した、儒教の余弊であつたであらう。流れて戦時中の宮城遙拝、戦歿将士の慰霊拝の様なものとなつた。軍隊が今少し精神的自覚に、目ざめて居つたなら、戦争中も又終戦後も、それとは少し模様は異なつたものがあつたであらうと考えられるのである。私は戦時中幾多の会合に臨み、主宰したが、一度も遙拝の礼をしなかつた、否、しなかつたのではない、せられなかつた。私は訓練を決して軽視するのではないが、自覚は教育の第一義で有ると云う信念のもとに行動した。無試験無採点と同時に、私は無賞罰主義を、実行した。

私の所謂三無主義である。私の教授時代には、学生が品行方正、学業優等なりとて、特待生として、月謝を免除したり、賞品又は褒状を与えて表彰したものであつた。他を奨励する効果もあつたであらうが、一方又色々の弊害もあつたことは、私は充分経験したことであつた。極端に評すれば、授賞は一種の賄賂教育であるから、私は学校では如何なる善行でも、賞品又は褒状を以て、表彰しないことにした。これは反対に、校規に反したものの、国家の刑法に触れたものでも、学校としては処罰せずして、不問に付した。厳罰に処して、放校したら、誰れが其人を救うか、さらば一旦学校へ入れたかぎり、どこまでも師となり、親となり、面倒を見又責任を取るべきであると考えた。この意味からして、学生の入学に際し、当時一般の慣習であつた保証人をとらなかつた。

さて三無主義を以て高工の教育に當つて見たが、単なる信念のみでは、容易く目的が達せられない感じがせられてならない。そのままにして置けば放縦に陥入る危険があり、野放し教育になる恐れがある。一旦放縦野放しになれば、終に拾取出来ない破滅を來たすであらうと、心配しはじめた。そこで私は私の教育上の信念である自覚を、学生の脳裡に植え込まなければならぬと考え、同時に学校の性質を能く学生に理解せしむる必要のために、私は毎週一度、一時間教壇に立つことにした。毎年四月から十月末までが一年生の講義で、翌年三月に卒業する三年生には、十一月から翌年三月までとした。新入の一年生には、学校一覽を配布し、それには職員名簿があるので、これを見せて、校長初め各科の教授及び職員名簿におる人々の略歴を聞かせた。次に三無主義の説明から、三ヶ年間に於ける学生々活に就き、学校の期待す

る件々を説明した。三年生には、翌年卒業する学生のことであるから、就職のための履歴書のことから初め、就職後の勤務、同僚間の交際、趣味、読書、贈答、贈収賄、出処進退、整家に至るまで、凡てを講義した。猶この外に臨時に全校生徒を集め、一学期に二三度は必ず講演した。臨時講演の場合には、掲示板に広告するが校長の訓旨とか、訓告と云う様な説諭らしい、文字を一切使用したことはない。学校はお互に切磋琢磨の道場であると考えて居るので、決して命令を下して、服従を強いる所ではない、とは私の公言して居る所である。故に私の講演も講義も、我輩はかく考え、又思うのである、諸君はどうであるかと。参考に供し、又判断に訴えるのである、附和雷同せず、自主的判斷の養成に資するためであった。人間各天賦の才能と徳性を持って居るものと、私は考える。其才能と徳性を、学校教育は、阻害することなく、恰も（あたかも）草木が春光慈雨を得て、生長するが如く、あらしめねばならない。又人間程差等のあるものはない。動物に例を取れば、全校の学生の内には、獅子の子も居れば、虎の子も居る、犬も居れば、猫も猿も、其他種々の動物の子が居る筈である。校長や教授は幾ら威張つて見ても、獅子でも虎でもなく犬か猫かも知れない、それが獅子や虎の子を、養育するのであるから、真の教育と云うものは、面倒なものと云わねばならない。それ故に教育は各自の本能を、引き出してやりたいのである。即ち自覚である。獅子の子は、親獅子の声を聞きたい、虎の子は親虎の声を聞きたいのである。それで私は一学期に一度づつ、各方面の名士を招き、講演会を催し、卒業式には後藤新平、高橋是清、金子堅太郎、等必ず当代の名士の列席を招請し卒業生のため記念講演をしてもらった。真の親の声を聞かしたためであった。と

に角我々の学校は、犬の学校であつたか、馬の学校であつたか、判断が出来ないが、学生個々の天賦の才能を引き出すため、自覚の途を開くため、思い付いただけの犬馬の勞をとつた。

毎年夏休みになると、私は暑中見舞を帰省中の学生へ発送した。其草稿は散逸したが校友の一人が保存していたとて、私に送ってくれたものは、私の最後のもので、一例として掲げて見ると

拜啓愈々（いよいよ）盛夏の時節となりました本年は自然の配在宜しからず稀有の大洪水の地方もあれば又未曾有の大旱魃の地方もあつた様に報道せられて居ります此等地方出身の諸君へは特に同情致しますと共に父兄の方々へ御見舞申上げます。

本校も其後至つて平穩無事で老生又幸にして頑健毎日一二時間登校いたし其余は悠々自適いたし居りますから御安神（安心）下さい。

回顧すれば大正十二年第一回卒業生を社会に送つて以来打続く世上不景氣のため卒業生の就職に當つて多大の苦勞をお互に致しましたが一兩年來形勢が好転し特に本年に至り全く愁眉を開き得る様になりました此吉報は多分猶明年にも継続することと信じます併しながら我国は目下非常時に際会して居ります明年又明後年に於ける軍縮會議の結果我国關係が如何に轉換するかは実に重大なる問題であります其結果は善かれ悪かれ早晚諸君に影響あることは明白な事実と存じますされば昨年の好景氣に寸時も樂觀を許さず国民一般に非常の決心を以て各自の義務を遂行し拳国一致して国策を支持せねばならぬ重大な秋であります此際教養ある諸君は皇国志氣の源泉として自から任じ宜しく父兄を鼓舞し

て国家を泰山の安きに置くの気魄と決心がなくてはなりません。

夏休の閑に乗り情弱唾棄のダンスホールに出入し亡国遊戯麻雀に耽溺するが如きは断じて許すべきに
あらずと存じます諸君はどうか自重自愛健全なる身心を鍛錬して御帰校あらんことを希望致します末
筆ながら父兄の御方々へ老生より宜敷御伝言下さい。

先は暑中見舞を兼ね一言所感を述べました。

昭和九年八月一日

学校長 鈴木達治

学校が初って幾年かの後、軍事教育が実施せらるることになった。実施の前ぶれがあると、いち早く反
対の声を挙げる学校もあり、軍事教育の前途、必ずしも樂觀を許さぬ形勢であった。政府は世論を刺戟し
ないため、軍事教育とは云わず、教練と提唱して、青年に必要な規律、服従などを、教えるものとし
た。私は政府の真意を察知して、学校教育は知識のつめ込みのみではない、規律、服従、礼節まで教えて
居る。何も軍門に降りて、これらの諸道德の教えを仰ぐ必要はない。必要なのは、実際上の軍事教育であ
る。不幸にして一朝戦争が起れば、従来の戦争とは、その趣を異にし、飛行機が参加する限り、内地も戦
場と化し、所謂銃後と云うものがなくなる。それであるから、青年学生は軍事教育を受けておく必要があ
ると、私は当初から軍事教育の賛成者であった。しかし陸軍から配属将校が赴任して、愈々(いよいよ)

教練を実行するには、充分受入れの準備は、学校側もしてかからぬばならない。即ち軍事教育に対する、
充分なる理解と自覚が必要である。それで一日私は陸軍省に出頭して、軍務局長津野一輔少将に面会して、
シンガポール築城に関する、適当なる講演者を依頼し、又海軍省にて、海軍大臣大角岑生大将に面会し、
米国海軍太平洋演習に関する適当なる講演者の派遣を請願した。シンガポール築城と、米海軍の太平洋演
習の二件は、当時我国と関係ある、軍事問題であった。私自身も講演したり、声明書を出したりして、学
校の軍事教育に対する態度を明かにした。

初めに我々の学校に配属将校として赴任せられたのは、田中陸軍少佐で非常に篤実なる常識家であつ
た。私は私の軍事教育に関する見解を述べ、学校に於ける教練は軍隊に於けるものと、異なる筈はない、
然らば軍隊同様に取扱われて差支えはないと思う。軍隊に於て命令に服しない不良のものを、びんたを打
ったり、靴でけったりする行為が正当とするなら、学校に於ても差支えはない、私は何等の不服の申立を
しないであろう、その代り学校の方は、万事私が責任に当り、軍事教育と学校教育とは、別個のものとし
て、お互いに容喙(ようかい 口出)しないと云う、紳士協定を申合せた。それがためか、其後の配属将
校とも、何一つ双方の間に不平不満がなく、私の知るかぎりには配属将校と学生間に、うるわしき関
係がむすばれておった。学校には御真影を奉戴しておらず、従って三大節にも、拝賀式もなく、集会もせ
ず、手製の教育勅語があるが、宮内省下賜の公式のものがない。配属将校から、それらの点をつっこまれ
ると、いやな事だと思つたが、一度もその様なことに会わずに免れたことは、実に仕合せであった。

相互の信頼と云わなければならない。

学生生活は全く自由の環境にあつたため、彼等の校友会活動の範囲も広く又自由であつた。園芸俱樂部から乗馬俱樂部まで出来た。就中最も盛大で発展したのが大陸会であつた。日本は島国ではない、亜細亜大陸と陸続きの東端に位して居る国であるとの観念から、大陸会と云う名称をつけたのである。我国の教育、政治、経済等凡てが、この観念から割り出すべきものであるとの、理想の下に活動した。会は校友会であるから、学生が主体であつたが、学校外の一般人の有志も可なり多数会員として数えられた。就中（なにかんずく）後藤新平伯の共鳴を得て、伯自身も一会員として、支持してくれた。毎年夏期休日には、朝鮮支那に見学旅行団体を出し、又大阪商船会社の好意を受け、会員は名のみ船員となり、船賃なしで北米合衆国を視察見学した。今一つの校友会の著しき活動は音楽部であつた。当時横浜市にもない楽器ベヒスタインのピアノを中心に、校友会のオーケストラが組織せられ、卒業式には国歌を初め校歌、螢の光まで、オーケストラで演奏され、卒業式の名物となり、来賓は二百五十名を下らなかつた。今になつかしき思い出である。学生の活動と共に教職員も大に活動した。創立から僅か数年後に、若い教授が初めて学位を獲得した。其れから次々と学位論文を作製して、学位を得るものが続出し、学校の品位を高揚すると共に、大に学生の教訓となつた。私が在職十五年間に、九名の学位獲得者が出来たことは、今以て快心事として居る。これは無論教授其人の優秀であつたこともあるが、学校の学術研究に対する態度も又多少貢献したことと思う。第一は図書経費は、研究に必要な文献の蒐集に重点を置いたこと、第二は研究に堪能なる教師に特別経費を僅かながら考慮したること、第三に研究に必要な薬品器具等の購入は簡便迅速に取扱いたること、第四に教授連中は、学生の教授指導と、各自の学問研究に任し、成るべく校務俗用の煩を避けしめ研究の時間を尊重したること等であつた。従つて教職員会議は、一年に一度か、二度位しか開かなかつた。それでも公私とも、学校の事務は何等支障を蒙らず、無事に進行した。

我校の自由教育は、三無主義を徹底的に実行するを以て、第一の要諦とした。しかし其の時代には、自由教育を公然と標榜することは、世間の問題として、許されなかつた。中等学校の中では、自由教育を提唱して、世間の問題となつて、ひどくたたかれたものもあつた。私は何も世間から、攻撃を受ける必要も、又弁護する必要もないと、決してこちらから公然と、自由教育を宣伝はしなかつた。のみならず、我校の自由教育を唱えねばならぬ場合には、自由啓発主義の教育と言つた。倫理教授岩橋尊成君の注意を取り入れたものであつた。当時教育の大綱は、教育勅語により、統一せられて居つた。大和民族としては、教育勅語を基本として、教育せられることは、無論のことであろうが、大和民族を超越して、人間として、即ち人類の一員として教育勅語を理解し、自覚する必要を感じる、徒らに形式に拘泥し、附和雷同を避けねばならない。それがため学校は一つの信念の許に立たねばならない。宗教学校の如きは、其意味を持つ道徳教育と称すべきものであらうと、私は思うのである。併し有力なものとは、私には思われぬ。各種実業専門学校は、職業教育であつた。以前の大学は其学則に、学問の深奥を究むる所と規定してあつたが、矢張り職業教育に過ぎなかつた。現在も同じであらう。我国の高等教育は、智育に偏し、徳育を軽

視する傾向があるとしばしば世間批判の標的となった事があり、一般に其弊害はみとめられながら、論議のみで、少しも改善せられず今日まで来て居る。学生々活は試験生活である、卒業して社会に出て、公務員となつても、まだ試験はつきまとう、即ち試験万能であるかぎり、智育偏在は当然のことであるであらう。其上大局から見れば、職業教育は人類に危険を与うるものである。職業教育によって養成せられた商工業者は、軍需品や、平和消費物を生産し、安価で精良なる製品を多量に作り、貿易により、国際間の競争と緊張を引き起す、それが戦争の原因となることは、往々にして歴史の示す所である。充分なる徳育を伴わない、智育偏重の職業教育は、危険である。懸鑑（いんかん 戒めとする例）遠からず、独逸は其例を示して居る。独逸は職業教育を以て国を興こし、職業教育を以て国を亡ぼした。我国も多分に其轍をふんだと、私は思うのである。私は道德の欠けた職業教育の危険を指摘して、私の在職中刊行した書冊に残して置いた。

既に記述した様に、ありふれた道德教育は無力に近く、単なる職業教育は、危険を含むと考えたから私は自由主義教育を取った。自由教育は、何ものの、束縛も拘束を受けず、天賦の才能を、自由に育成せしむるのである。訓練を与えるのではなく、自覚を促がすのである。訓練は自覚から自生するものでなければならぬ。勉学に研究に其他万般のことに自覚し、判断を誤らぬ独立自主、即ち健全なる個性を完美することを期するのである。完美したる個性を以て、団体の訓練に参加するのである。団体の訓練は、学校に於ては校友会の事業である。それであるから、教師も何所からも、束縛干渉を受けず、各自の個性に於て、教育に自由の手腕を振うことが出来るのである。

自由教育を実行するには、学校全体が自由の空気を呼吸しなければならぬ。即ち校風が興らなければならぬ。校長や教授陣は勿論のこと、給仕や小使に至るまで、校風に染まり、一団とならなければならぬ。一言にして言えば、学校長の声は学生には勿論、給仕小使まで、全校にひびき渡るべきである。私の声が全校にひびき渡るためには、あらゆる手段方法を尽くした。前述した学生に対する学校の行事は、幾多の行事の中の二三の例を挙げたるに過ぎないのである。之を要するに、学生と学校とは、対峙すべきものではない、互に、あい信頼すべきものである。学校は四六時中、親ごころを欠いてはならない。幼稚園や小学校のみではない、高等教育に於ても又然りて、これが私の教育上の信念であつた。

自由主義による私の教育には、回顧して見ると、何一つ私の創意、創見と見られるものはない。既に記述した私が最初に教育を受けた京都の同志社を初めとし、熊本の五高を経て、東京蔵前に至るまで、幾多の師や、仕えた学校長や、同僚先輩の行跡を考え、其うちで私に感銘を与えたものを、単に摸倣したに過ぎないのである。又学校外に於ては徳富蘇峰、金子堅太郎、権藤成郷、共他幾多の諸先生より、啓蒙指導を受けた。此等の人々は多くは故人となつた、追憶敬慕の至りに堪えない。

歲月匆忙（さいげつそうぼう 歲月はすぐに過ぎ去り忙しく落ち着かぬ）私が教壇を去つて、既に二十三年を過ぎた。自由教育の手段であつた三無主義は今も猶私の念頭を去らない。私の知る世間幾多の知人は、今も猶共鳴してくれるのは、快心の事であるが、遺憾ながら実行してくれる人はない。試験地獄は古い時代からの我教育界の難問題であつて、毎年どこかで試験地獄から起る災難がくりかえされ、解決の望

みが少い。上級学校への入学試験のみならず、入学してからも、卒業までの間は、絶えず試験になやまされるのである。これがいか程、青年学徒の学生生活と云うものを、憂うつにするか知れない。孔子は論語の中で、これを知るは、これを好むにしかず、これを好むは、これを樂しむにしかず、と述べて居る。試験で学問をつめ込むのは、知らしむると云う、程度のものであって、学問を好むとか、更に進んで樂しむとかと云う程度には、達し得ないものである。学校の雰囲氣、即ち校風と云うものは、青年学徒をして、学問を好み、又樂しむと云う、境域に居らしめたならば、何を好んでか、青年学徒は、校外に走り、政治や労働の實際問題に、關係狂奔するものがあるうか。高等教育は真理の探求であることは、何人も認識する所であつて、真理を応用する所ではない。応用は学校出身後であるべきである。青年学徒をして、校外に脱出せしめ、社會の實際政治や労働の粉糾に狂奔を許す如きは、正に教育の邪道である。学校は外洋の風波を遮った、防波堤内の海面である。外洋と相通じては居るが、静かに限られた海面である。此所で師弟が切磋琢磨の效（こう 効果）を積み、他日万丈の波濤を外洋に凌ぎ得る素質を作らしめなければならぬ。此所は賞罰のない、平和にして平等、自主独立であるが、対立のない学生社會であり、學校生活である。この様な学生社會では、如何なる事情があろうとも、教員室を襲撃したり、最高學府の學長に暴力を加えて、負傷せしめたり、他人の喧嘩の仲裁ならとにかく、隊を組んで、加勢に出かけるなど、夢にだも思わぬ所で、教育上実に戦慄すべきことである。

社會を組織して居る人間ほど、種々雑多なものはあるまい。貧富、賢愚、善人、悪人と其種別と其程度は数え切れるものではない。それが一度は學校で、教育家の手で、訓陶を受けたものであることには相違ない。これを考えると教育家の責任ほど大なるものはあるまい。教育者は一方では労働者であるかも知れないが、一般労働を超越した崇高なる特殊の職務の任を、担当して居るものとの、自信と自覚が、自然に湧き起るべきであると、思われるのである。教育は國家社會に、最大の責任を負う、他の職務を超越したる、崇高のものであるとの、自信と自覚に達すれば、自由教育主義に帰趨せざるを得ないであらう。どこからも圧迫を受けず、何物にも拘束せられず、思う存分に、各自の責任に、精魂を打ち込むことが出来るのは、自由教育である。教師と學生の間のみならず、事務方面も又同様であつた。わが自由教育十五年間は、教務も庶務も會計も、規定条文はなく、全く不文律で故障なく、円滑に万事を処理して行つた。好んで又樂んで仕事をすれば、何事も左まで苦勞にはならぬらしい、又左まで健康にも支障がないらしい。建築科の學生などは、時々徹夜して製図をして居つた。化学の實驗室などは、毎夜八時から九時頃まで、電灯は消えなかつた。別に教師も監督も、ついて居らなかつたが、自由教育十五年の間に震災後のバラック建築でボヤ一つの火災にもかからなかつた。私は火災に就ては自由教育と關係があり大いに關心を持って居つたから、私の煙洲漫筆に「學校と火災」と題する一文を残して置いた。

一家が親父の失敗のため、零落の非運に陥りたる際、一家が協力して、子女の教育に重点を置き、家運を挽回することは、最も明朗で且つ最も賢明な行き方であると思ふのである。一國も一家と同様であるべきで、今次の大戦のため、台灣朝鮮等領土の全部を失い、幾百万の青年子弟の生命を犠牲にし、明治開國

以来の蓄積した財を消失し、其上国威を失墜した。この大国難に当面して、何を目標として、国家の再興を計画すべきであるか、慎重な問題である。政治経済産業貿易等、何れも主要な問題であるが、其根幹が人間である以上、人間教育は国家再興の第一義と尊重すべきである。しかし人間の生命の維持存在は、直接物資に依存するのであるから、終戦当時の物資危機に際しては、教育は第二義的に考えられた傾向のあったことは、無理からぬことであるが、これは暫仮的のことであつて、個人としても、又国家としても、教育は人間至上の尊重すべきものであるとの精神に生きねばならない。

太平洋戦争勃発まで、十年間日本に滞在した、米国大使グルー氏は、帰国後「滞日十年」と云う書を刊行した。之を読めば、如何にグルー大使が、我国情に精通して居ったことが能く分かる。此人が戦争勃発の翌年又、交換船で帰国し、米国各所で演説した。其中で次の如きことを述べて居る。「強大なる敵日本を打倒するには、唯日本の軍事力のみでなく、歴史的なる日本人の民族精神と伝統を抹殺する所まで、行かねばならない。」当時私は此記述を見て、流石にグルー大使は賢明でえらい、我国の連中は、米鬼とか英畜とか、敵国を単に悪罵しつつあるのに、大使は我国の急所を把握して、米国に警告して居た。私は其賢明に感服すると同時に、恐怖に駆られた。終戦後占領政治を経て、独立日本の今日に至つても猶教育界に於ても、又インテリ革新論者中にも、グルーラインに沿つて、我国の民族精神と伝統の抹殺に助力しつつあるのを見るのである。これは果たして教育界の一老兵であり又廃兵である私の頑迷固陋（ころうころう）古い考えに固執（こくしつ）の僻見（へきけん）（偏見）であろうか。我国教育界の憂うべきことではなからうか。

世間には私の所謂三無主義には共鳴してくれる人士があるが、今まで之を實行してくれる人のないことには、私は失望せざるを得ない。一面から言えば、試験や採点や賞罰を以て、学生々徒に対するのは、学校は武装をして居る様なものである。戦争を忌避し、平和を希望し、軍備を罪惡とする論者は、学校教育の武装解除を唱道すべきではなからうか。試験、採点、賞罰の三者は、何らかの意味で、学生々徒に圧迫と束縛を加えて居ることは明かである。眞の自由教育は、何等の圧迫や束縛又は強請のなき境遇に於て、初めて行はれ得ると私は信ずる。学校教育が初めて行はれた明治以来、学校騒動なるものが流行し、独り騒動は学校内にのみ止らず、外部にまで波及し、甚しきは侵略性を帯びるまでに至つた。又独り学生々徒のみならず、教師までも其歩調に合致するものがある様になった。従つて師の恩という言葉の消滅も、最早遠い将来と思えなくなった。自由主義教育の徹底は、学校騒動を一掃するであろうと私は信じる。

私は現在の凡ての官公立の学校に於ては、自由教育を實行することは、困難であると思う。なぜかと云つと、最高学府の大学の総長を初め、各種の学校長は、正当なる教育者の地位に置かれず、行政執行の地位に居るに外ならないからである。学事に関する凡ては、教授会や教育委員会や、甚しきはP・T・Aと云う様なものにまで、左右せられ、牽制せられて、長たる人の自由意思は行われなためである。これこそ民主主義の本節であると云えば、我輩又何をか云わんやである。

幾十年の昔、福沢諭吉先生は次の様なことを述べて居る。「日本人にして将来、思想的に悪化して我国體を害せんとするが如き人物が出づるとすれば、必ずや官立学校に於て養成せられたる人々の中より出づ

るであろう。何ぜなれば、我が慶応義塾のような、リベラルな平等的な、階級的思想のない所では過激なる思想は起り得ない、官立学校の如く、一定の箱の中に入れて教育するが如きは、大なる教育方針の誤りであつて、かかる不自由なる教育方針の下に勉学を続けるものは、一步誤れば、過激な思想をいだくに至るものである。」と語つて居る。福沢先生は当時の官学と私学の、教育の傾向の差異より、かゝる意見を陳べられ、それがよく適中したことは、我々のよく知る所である。福沢先生は、其当時から官立学校よりも、私立学校に、自由思想の涵養育成を、囑望したもので、今日と雖も（いえども）又同様である。私が三無主義を実行したのは、大正より昭和に涉つた時代で、至つて不自由なる、又画一主義の世の中であつた。それでも自由主義教育の実行の余地があつた。往時を顧みて、民主主義の今日は、猶一層窮屈の感じが、せられてならない。之を要するに、自由主義教育は、私学に於て、実行し易いと、見らるのである。私学の教育家に、三無主義教育の検討を切望するものである。只眞の教育を貫徹するためには、私学は学校の経営に、企業的精神より、解放せらるることである。

既に述べる如く、三無主義は決して、奇抜のものでもなければ、又新しきものでもない。徳川時代にも、今日の大学に相当する、学校があつた。私学即ち私塾として、広瀬淡窓の咸宣園、管茶山の夕陽邸舎。吉田松陰の松下村塾の如き有名であつた。又藩の学校としては、水戸の弘道館を初め、大抵の藩には、藩立の学校があつた。私自身も幼少の時、郷里の私塾で、教育を受けた。恐らくこれらの私塾にしても、藩校にしても、試験とか、採点とか云うものは、なかつたと思う。故に無試験とか、無採点とか言ふものは、何等新しい制度のものではない。

賞罰に就いては、昔から様々な美談や、逸話は残つて居る。が私が教育に従事して、私の心を最も惹くものは、キリストの言行である。キリストは或時、学者とパリサイ人が一人の女を連れ来り、此女はモーゼの律法により、石にて打ちこらすべき罪惡を犯した現行犯である、刑の執行をして差支えなきか、との訴えを受けた。キリストは暫く、沈黙の後、汝等の中、罪なきもの先づ石を以て打てと告げた。彼等パリサイ人と、学者たちは、これを聞き良心に責められ、一人去り二人去り、終に誰れも居らなくなつた。そこでキリストは女よ去れ、再び罪を犯すことなかれと申し渡した。（聖書ヨハネ伝八章）猶マタイ伝十八章にも、犯罪を放免する、キリストの言葉がある。無処罰は二千年もの昔に、キリストの既に唱道したるものである。今ごろ二千年の昔の話を持ち出すのは、カビの臭いがするとして、嫌氣を催す人があるであろう。しかし私には、此処にも故きを温ねて、新しきを知ると言ふ、キリストよりも尚五六百年も昔の孔子の言葉が思い出される。

私はキリスト教徒ではないが、キリストの無処罰主義には、夙に（つとに）以前から）感激し、私の三無主義の一角には「汝等の中罪なきものは、先づ石を以て打て」と云う精神は、潜在して居る。私が在職中、他に兼任校長をして居つた学校の生徒数名は、共同犯罪で、新聞紙上に曝露された。監督官庁が其生徒等の処分を促がすこと急に、又厳であつた。私は余儀なく筆を取り、聖書の以上の記事を引用して、一文を草し、新聞紙上に投稿した。キリストのお蔭で当局は沈黙し、学校は無賞罰主義を貫徹した。キリス

トは無処罰主義の先祖である。何故にキリスト教の諸学校が、教祖の遺訓を奉じて、無処罰主義を標榜し、実行せざるものによ、私は聊か（いささか）不思議に思わざるを得ない。

一国の文化が、他国の秀れた文化と接触すると、其所にまず混乱が起る。最後に他国の文化に征服せられるか、又他国文化を吸収消化して、自国の文化を育成発展せしむるかの二つの道あるのみである。我國の古代に於ける支那の倫理文化、印度の仏教文化の渡来の時の混乱、其後の同化発展が、我国歴史の示す所である。今次の大戦は、一方には民主主義、他方には共産主義の、二大思想の襲来を受けた。今は猶混乱の時期で、教育界に於て、その最も甚しきものがある。終戦以後歴代の文部大臣は、前後処置に甚しく苦勞した。天野文部大臣は、教育の指針を示さんがため、前代の教育勅語に代るものを作らんとして、出来なかつた。がしかし所謂教育二法案は成立したが、これは教育界の霸道である。私は現下の教育の根本に於て、確たる対策の私見はない。只現下の教育に対し、多大の不滿がある。私は現下の学校に於ける、しばしば世間に報道せられる、一部の職員や、生徒の態度に、極度の不滿と不安を感じるのである。自由教育を徹底せしめ、三無主義を実行することにより、幾分の匡正（きょうせい）が出来るものと信ずるのである。私は又戦後の日本は、全く新しい国家になった、旧時はすべて忘るべきものであるとの一部教育界の態度に、共鳴出来ないのである。私の頭は頑固であるかも知れないが、外国に疎開する程の余裕と、要領を持たないのである。歴史的民族精神と其伝統に限りなき郷愁がある。抹殺せられたくない。故に私の若い時代に経験した事実を陳述し、三無主義より名教自然に至りたる経路の一端を語つたのである。

昭和三十三年三月八日

煙洲 鈴木 達治

煙洲著述目録

- 自由教育の俤 昭和四年九月二十日発行（創立十周年記念出版）
自由教育十年 昭和五年十月三十日発行
自由教育の片鱗 昭和八年四月二十日発行
名教自然 昭和十二年十月二十日発行
入愚亭独哮 昭和十七年八月十五日発行
煙洲漫筆 昭和二十六年二月二十日発行
自由主義教育の思出 昭和二十九年三月十五日発行（パンフレット）
煙洲残筆 昭和三十四年二月発行

名教の碑辺萬がくの春。桜花独り相親しむべきものあり。
逍遥去らず君いぶかるをやめよ。二十年前樹をうゆるの人。

煙洲先生のこと

煙洲先生は、明治四年九月十一日、愛媛県の農家の長男として生まれた。生まれた時、産室の天井から蟹が落ちた、蟹は天神様の御使であるから、将来きっと学者として名をあげるに違いないと、家内中から喜ばれた。

それからあらぬか、先生は幼時から祖母及び父母の許で極めて恵まれた環境で、勉学に励むことが出来た。一例をあげると、一農夫である父君が小学校の生徒である息子の為に、日木外史、春秋左氏伝、文章軌範等という一冊の書籍に当時、米一石以上の代価を払はれて、時折京都から求められたということは、世にも稀な有難い父及び母であったと先生も書きおかれている。

その様な事情から、家事は一切顧みず学業に励み立身することが、最上の孝行であるという気持ちになられて、明治十八年先生十五才の時京都へ遊学して同志社英学校に入学、同二十三年同志社理科大学に入学同二十六年卒業に至る間、授業料免除の特待生であった。同校卒業後、熊本に於て第五高等学校等の教員をつとめ、明治三十年七月東京帝国大学化学科に入学し、三十三年卒業後、仙台の第二高等学校、仙台医学専門学校教授を兼務、五ヶ年後の明治三十八年広島商等師範学校に転勤、在職三ヶ年にして志を得ず、明治四十一年六月より、蔵前の東京高等工業学校に転じ、文部省命により同校教授として三年間電気化学工業研究の為、独、英、米三國に留学、明治四十四年五月帰朝後、東京高工応用化学科教授として教鞭をとる傍ら、空中窒素固定ハーバー法の特許買収、朝鮮電気工業株式会社、日本カーボン株式会社、三菱鉛筆株式会社等の設立、蒙古天然ソーダの探険、人造絹糸の企業化等、精力的な活動が、大正九年新設された横浜高等工業学校長に任命されるまで続いた。

煙洲という雅号の由来ともなった先生の葉巻愛用は蔵前時代から有名であったらしい。大きく所によると、先生の葉巻はドイツ留学中、下宿の主人が食後うまそうにのむのをみて、御自身もたしなまれる様になったそうである。

大正九年横浜高等工業学校創立より昭和十一年退官される迄、満十五年間は長い先生の生涯で、最も活動的で而も最も光輝ある時期で、恐らく先生御自身最も得意の時代であったろうと思はれる。先生の子弟への薫化が最も強く表はれたのも此の十五年間であった。

名教自然なる成句は何時頃から出来たか、明かでないが、先生は熊本五高、仙台二高、広島高師、東京高工等での経験から、御自身の信念として無試験、無採点、無賞罰の三無主義を確立され、横浜高工開校に際し之を公然と標榜して以来、在職十五年間、敢然として自由教育を実行された。

凡そ、文部省直轄の官立高等専門学校に於て、かかる教育が支障なく行はれ得たということは、実に驚くべき事で、而も文部省は、先生の職務勉勵に付き、当時としては少からぬ賞金を数度に亘って下賜している。

如何に先生が卓見と信念とを持って居られたばかりでなく、勇氣と実力とを兼ね備えて居られたか想像に難くない、「横浜の鈴木は別だ。」と文部省でも時折言はれていたそうである。

先生は官立の学校であり乍ら、御自身は私立の学校と同じ考えの許に教育に当られた。如何に創立初代校長とは云え、十五年の間国家社会も変化し、教授学生も変化する中にあり乍ら、御自身の教育理想を遂行し、退官後に至る迄、長い間独自の校風をのこすという事は到底余人には出来ないことである。

恐らく在職中にも自由教育に批判的な、否むしろ反対の教授や学生も居たろうし、文部省其他との摩擦もあつたと思うが、清濁併せ呑み、総てに適切な処置をしつつ教育方針を貫きとおして退官された事は、今時の教育者や政治家等の及びもつかぬことではなからうか。

先生は人間は出処進退が大事であるときよく説かれて居られたが、御自身でもその範を垂れた。創立経営の業成るや、自ら選んだ人に後事を託して、惜しまれつつ退官され、而も其後も、政界、実業界、教育界

からの懇望、招聘を避け、悠々自適、晴耕雨読の日常を送り、専ら学校と卒業生の行末を見守りつつ、二十数年の余生を終られた。

先生は子孫の為に「追憶敬慕の記」を書き遺されて居られるが、其中で、「父の一生に孔子よりも多く老子に似た処がある、不言の教を行い、功成って居らず、という老子の文字は全く父其ものであるかの感がした」と述べられている。孔孟よりも老荘に近いと云はれる先生の名義自然の精神も遠く幼時から培はれたものであろう。

先生は書や漢詩に於ても一家を成して居られ、先生の書を座右の銘として居る卒業生も極めて多いが、これも又同書に於て、「近世に於て父程能筆の人はなかった。」と述べられて居るから、先生の書は、その煙草と同じく父君からの衣鉢であるらしい。酒を嗜まず茶を好み清談を喜ばれたのも全く同様である。

創立後まもなく関東大震災に遭い、校舎が全焼した時も、文部省の名古屋移転の命をこばみ、先生の自力でバラック校舎を建て、学校復興に当られたり、在職中も教授や学生にも適当な研究費とか運動費等を、人知れず渡されていた事もある様にきくが、そういう金はどこからか工面されて来たものであろうが、先生御自身の経済とか財産は余り顧られず、良く云えば無欲恬淡、悪く云えば無頓着であった。

先生のことを書けば尽くる所がないが、煙洲先生の著である「名教自然碑の由来と教育私見の断片」を再版発行するに際し、亡き煙洲先生の面影を偲んでその生涯の一端を補記した次第である。

本書は横浜国立大学工学部学生諸君に贈呈して、名教碑の由来を明かにすると共に、煙洲先生の創立以来の教育理念を知っていただきたいという我々一同の希望で再版配布されるものである。何分初版は昭和三十三年発行なので、内容も当時の社会情勢等にふれて記述されている箇所もあり、多少理解し難いかとも思うが、一読以て何か得る所あれば、我々一同の欣快とするものである。

昭和四〇年六月十五日

煙 洲 会



